

第6回エネルギー政策検討会会議議事録（要約）

1 会議の概要

- (1) 日 時：平成13年9月10日（月）午後3時から午後4時5分
- (2) 場 所：第1特別委員会室〔福島県庁内〕
- (3) 次 第
 - ア 開 会
 - イ あいさつ
 - ウ 議 事
 - エネルギー政策検討会（意見交換会）の内容について
 - エ その他
 - オ 閉 会

2 議 事（要約）

【司 会】

今回は、今後の検討の一つの中間的な整理を行うというのが趣旨。

【事務局】

資料に基づき説明

【司 会】

今までの検討会での発言、論点の説明を一つの叩き台として、それぞれの立場で今までの感想や、今後の進め方について、それぞれ御発言いただきたい。個人的な見解で気楽に発言をしていただきたい。

【各メンバー】

- 自然指向の考え方の中で我々の生活が豊かになってきているというのは、いろいろな科学技術の進歩の中でのベネフィットが一番大きいのではないか。
- ベネフィットを受けている中で、科学技術というのはどんどんどんどん進歩していくべきものだという先入観的なものがある。
- 1997年のクローンの羊には、ショッキングな印象を覚えた。
- 科学技術の進歩が人間の文明・文化の発展に寄与してきたという姿はあるが、際限なくあって、クローンの羊のような姿があったのであれば、科学技術の進歩というのはなんなんだろうか。
- 科学技術の進歩に関わる方々の倫理的な面でのセーブは不可欠だが、それよりもっと根元的な、文明論的なあるいは歴史哲学的なものが必要ではないか。
- 原子力政策、あるいは地域振興の関わりを考えた場合に、これからの個人なり企業なり社会経済活動なりが、どのようなスタイルで動いていくのか、そのような中でエネルギーの需給見通しがどのように客観的にたてられるのかが重要。
- 先般エネルギーの総合部会・需給部会合同部会での3つのケースで試算した形があるが、きちんと踏まえた、より精緻な需給見通しが大事。
- 様々な生命体の活動は、自然に優しい、環境に負荷を与えない取り組みがどんどん求められる。どのようにライフスタイルが変わっていったら、どのようにエネルギー源のミックスがシフトしていくのか等を検討できれば。
- これからのエネルギー政策なり、地域との関わりなりの問題については、現実的な解決の手法を求められている。いろいろなお話やデータを見せていただきながらさらに詰めていく中で、我々の評価が出てくる。

- 我々自身がレイ・エキスパートとなる前段階まできているのではないか。
- この検討会を、県民あるいはマスコミに完全にオープンにしていることは、新しい情報公開のスタイルである。
- 今までの検討会は、質疑の時間が必ずしも十分にとれないため、やや物足りなさがある。
- 講師は、総論で、あるいは自分の専門的な分野に特化して答える傾向があるので、嚙

- み合っていない答えが返ってくる場合もあった。
- エネルギー、原子力のあり方でベースになるのはまず需給の問題。国の公表数値、シンクタンクの数値などが、全くかけ離れている。本当にエネルギーがどれだけ要るのかという議論がみえていない。
 - ベストミックスの議論をしていく際に、省エネ、新エネがどれだけできるのかの可能性や、コストの議論が必要。
 - 電力の自由化論と地球温暖化の議論、この2つが新しい外的な要因として強く入ってきている。これらについても勉強が必要。
 - 国民的合意の議論で、福島県内は盛り上がっているが、一方で、国民全体としてこういう議論はどれだけ考えられているのか。もともとエネルギーの議論は、国民全体の議論である。
 - 今後、具体的な検討をするためには、分科会などもやっていかないと未消化になってしまうのではないか。
-
- 基本的にはエネルギー政策というのは、霞ヶ関の専管事項みたいなところがどうしてもあり、地方では、我が国のエネルギーがどうなんだとか、原子力の安全性はどうかという点については目を離してしまう。
 - 原子力発電は、そもそも危険性を内在化、潜在化してるものだが、本当に原子力に代わる代替エネルギー源というのがあるのかどうかというところをもっと議論すべき。
 - 環境問題との関係で望ましいエネルギーとして自然エネルギーを活用していくことはよく分かる。国内各地でそれをもっとつくって確保していくという考え方も示されたが、自然エネルギーをどう確保するか、我が国の状況からして確保できるのかについてをもう少し専門的な立場での検討が必要ではないか。
 - 最終的にそれを決めるのは市場社会となると、事業を営んでいる市場社会の責任者の話を聞いていくというのがひとつの方法ではないのか。
 - 自由化という道は開いたが、本当に進むのかというと9電力体制の我が国の場合はあまり期待できないのではないか。そのへんをまさに電力会社の責任者がどう考えるか、という観点にたった議論をすることが必要。
-
- いろいろ議論を聞いていると、生産地と消費地の問題とか、大都市と地方の問題、それから需給の問題についても将来予測の問題、安全性の範囲の問題など、大変根深いものがあると感じた。
 - データ改ざん事件とか、JCO事件が発生したが、悪意あるいはヒューマンエラーの中で、安全性の議論をしっかりと聞いてみたい。
 - 原子力を推進しようとする人々の意見も不足している。
 - 自然エネルギー推進の方は、分散型国土構造の実現ということであり、一方、原子力を推進されるという意見をお持ちの方々は現在の一極集中国土構造の維持を暗黙の前提として考えて意見を話されているのではないか。
 - 将来の国土構造とエネルギー政策をリンクした議論が必要ではないのか。多極分散なのか一極集中なのか、将来の国土のグランドデザインというものをある程度意識した議論が必要では。
 - 現在の新エネルギーのシェアが低いからといって期待度も低くていいということではない。技術開発についていろいろ聞きたい。
-
- 昨今の科学技術の進歩に伴い、科学技術について一般国民の方が理解するのはかなり難しいというような状況になっているということ、その反面、ITとか、情報公開を効果的に使えばレイ・エキスパーツという形での相当な関与ができるということで、HIV訴訟のアクトアップのような活動の例をあげ、このような活動でアプローチは可能だとのお話があった。
 - このような先端技術とか巨大技術についてなんの知識もない方がそこまでの知識を持つということについて、個人では相当難しい点もあり、ある程度組織的な対応も必要な

- のではないか。
- 実際面として、原子力のような大きな技術的課題についてどのようなアプローチができるのかなということも懸念されるが、科学技術に対する取組み事例があるのか勉強してみたい。
 - 本県における問題意識の根本は、エネルギー政策決定のプロセスのあり方論ではないか。例えば推進、反対にせよ、政策決定のプロセスのあり方論としての検討すべき点もあると思われる。
 - 温暖化防止策、また省エネ対策、あるいは原子力の問題、さらには環境問題等々に触れて、エネルギー問題の重要性を改めて認識させられた。
 - 新たなエネルギー政策については、グローバルな発想によって解決策を見いだすこと、先送りすることはもう許されないこと、そういう状況にある。
 - 原子力の危険性については十分に認識できるが、これに代わる代替エネルギーというのは、果して原子力を上回るような状況になっていくのかどうかハッキリしない。
 - 県としても今後エネルギー政策の方向性をどうするか。今後は、原子力よりは自然エネルギーの方に重要性が高まっていくのではないか。県としても、日常生活に基づく省エネ対策、あるいは、新エネルギー政策に関する県レベルでの技術開発、振興策が必要ではないかとも考えられる。
 - 国民の意識改革が重要だとの話もあったが、同じように県民の新エネルギーに対する意識改革というのをどういう方法で、どんなふうにやっていくのか、一般の人たちに共通認識、意識改革を図っていくための方策をどうすればいいのかということも検討すべきではないか。
 - 環境税について本県としても今後どうするかということ。企業は、高いコストでは売れず、技術開発をし、安い、環境に優しい消費が見込まれるようなものを開発をする。環境問題も含めてエネルギー政策に加わっていくという形では、環境税の導入も今後考えられる。
 - 一番、我々考えておかなければならないことは、今の県民の意識改革も含めて、今後、我が国及び本県を担っていく子どもたちへの環境教育を徹底していかなければならないということ。
 - 21世紀の科学技術と人間社会のあり方については、方向性が見えたのではないか。
 - 国民は、科学技術について勉強してレイ・エキスパートになる、また、(霞ヶ関に任せておけばよいという) パターナリズムに対抗する、そのためには、結局は情報公開が大事だという印象を持った。
 - エネルギー政策のあり方については、国民的な合意が必要である、エネルギー政策は国が決めるという考え方をいっぺん問いなおす必要があるとのことだったが、今後は、具体的に、基礎的な数値などをもってこれからの検討をしていかなければならない。抽象論ではなくて、バックデータを使ったものにしていかなければならない。
 - 欧州で原子力を断念、止めたというが、我が国は、それとは全く逆の方向に行ってこれからまだ作るというようなことであり、なぜ、同じ問題なのにも関わらず欧州と我が国で全く違った方向に行っているのかなということの疑問。
 - 「欧州的価値」というような言い方をされたが、欧州には社会文化としての対話があると。また、持続可能な発展を作る社会についての社会的目標としての合意がある、と。
 - 一方で、持続可能な発展ということでは、我々だって言っている。何が違うのかというと、経済と環境の調和ということが合意性がとれていると。
 - 今の我が国のあり方からすれば、経済というものが何となく上にあって、環境が劣にあるとまでは言わないまでも環境に対する理解というのが、我が国という水準からいった時にそこいらの違いがもしかすると別の結論にでているのではないか。
 - 全体の社会経済構造というものがあって、その意識とか価値観とかがあって、原子力

とかエネルギー政策というもの、あるいは需給見通しとかを考えていく必要があるのではないか。

- 地域主導のエネルギー政策をとるべきではないかとの提案があったが、ある意味では実戦というものも伴う必要があるのではない。また、どのような方法があるのかを考えていきたい。
- 国のエネルギー需給プロセスについては、例えば、第1次オイルショックの時には、脱石油、省エネということで、何となく国民的な大合意ができ、現実に達成されて、現在の日本がある。
- 特にCO2問題、これを意識して将来のエネルギー需給を考えたときに、原子力への負荷が非常に高すぎる。
- また一方で、現在の政策の中で、電力料金も含めての自由化あるいは市場主義というような考え方から、新エネルギーあるいは地域エネルギー開発が、コストの問題から非常に開発を困難にしている。その辺が政策的に矛盾している面があるのではないか。
- エネルギー問題は、いろいろと非常に難しい問題。生活スタイルや人生哲学の面までも踏み込まなければ判断できないような部分がある。
- このように福島県が問題提起を行い、これをやっていること自体が国民の合意、県民の合意を図ることにもなる。
- 結論をもっていくという問題ではないのではないか。ここで我々が県民と同じような目線で、素朴な疑問、それをいろいろな先生に来ていただいて解くヒントを我々が提供していただければ、この問題提起が非常に大きな意味があるのではないか。
- エネルギー政策は、生き方そのもの、国の政策そのもの、国自身あるいは我々自身の基本的な部分に係わってくる。これを絶対これではなければならないというふうに突き詰められるかどうかというのは、なかなか難しい問題がある。
- 素朴な疑問に対して、この意見というのはこのような議論でなってきた、とか、この意見というのはこういう意見でなりたっているというようなことを「解きほぐす」ということで提示できれば、この検討会というのは非常に前進をしているのではないか。
- 問題点、素朴な疑問、県民が感じているもの、それを吸い上げて、どこまで我々が糸をほぐすことができるのか、そのようなことに論点を絞って今後進めていければと思う。
- やはり自由化とこの原子力政策というのは本当に両立するのかどうか。核燃料サイクルを含めて自由化という問題が両立していけるものなのかどうか。
- 地球温暖化と原子力というのはいったいどういう意味を持つのか。そのタームによっては切り札になるし、全然役に立たない。
- 今いろいろとエネルギーの分権化という議論がでてきている。地域主導、民主的にということだが、そうは言ってもやはり国とか事業者といった立場の責務、それはやはりあるんだろうと思う。そのへんとの関係をどのようにみていくのか。本来は国の責務であるはずのものが民主化という名のもとに我々に負担させられてしまっただけで、これはやはりきっちりと議論していかなければいけない。
- 既に原子力発電所が10基ある。ですから共生という問題も真剣に考えていかなければいけない。その共生というのはどういう意味なのか、視点として、論点として考えていく必要がある。
- 議論は国の審議会等々でいろいろなされているのかもしれないが見えてこない。
- いずれにしても十数年、立地地域としての立場で原子力政策とかエネルギー政策とかいろいろみてきたが、どうもおかしいなという部分があり、モラトリアム、一年間じっくりやってみようということになった。
- その原点を忘れずに、やっぱり国民のモデル的なレイ・エキスパートになるべく努力していきたい。

以上